祝詞殿用各種案 10 台（井上社寺工業）

鬼面額（多聞会）

天然水晶玉 25 φ（信栄石材）

賽銭箱 2 台（井上社寺工業）

宮大工の心構え

有限会社井上社寺工業
代表取締役・五代目　井上隆正

社殿建立において、宮大工として最も留意すべき点は①人の後ろに〝神様〟を見、決して独善に陥らないこと。②施工に当たり、与えられた条件の中で現世の人々に納得して戴くだけでなく、後世の人々に恥じない仕事＝神様に恥じない仕事に精一杯勤めること。③創建当時から、先人達が風土に営々と培われてきた〝風致〟を受け継ぐことを本義とすることです。

つまり、一般に言われる様な、大経材の使用並びに、組み物、伝統納まり、仕口の施工による耐久性の確保は、本来は宮大工にとって当たり前のことであり、移設、改築した各社殿の配置、威容が風致（神域としての風景、環境）にいかに融け込み、いかに調和がとれたものになるかということを何よりも大切に考えております。

その為今回、神社側のいにしえの資料（江戸期の絵図面）は大変参考になり、両本殿の位置補正という事前施策により、本来の威容により近ずけたのではないかと思います。またそれにより、今まで拝観ができなかった本殿が、氏子の皆様の前にその荘厳な姿を現されたことは、大きな慶びでございます。

この度、皆様のお陰を戴きまして、無事竣工を迎える事が出来ましたが、宮大工にとってここで勤めが終わった訳ではありません。何故ならば、建築木材は生きており、建立後にも呼吸をし動きます。その為、今後も幾度か検査、締め直し補正を行う為の対策も既に施してあります。

建立された社殿は皆様方の大事な財産であると同時に、私どもにとりましても大切な歴史であり、財産であると考えております。今後もこの鶴崎神社の〝風致〟が、氏子の皆様の信仰の場として受け継がれ、新たな時代の中にありましても、我が国に誇るべき文化としてその歴史が刻まれることを、心からお祈りいたします。

【新聞記事】

山陽新聞　（平成十九年九月十一日）

18トンの本殿そろり移動

早島町 鶴崎神社　曳家工事始まる

曳家工事が始まった鶴崎神社の本殿

社殿の改築事業を進めている早島町早島の鶴崎神社で十日、本殿を解体せずに建物ごと移動させる「曳家工事」が始まった。九月下旬には約十㍍北に本殿が移る。

拝殿の建て替えなどに伴い、木造入り母屋造りの本殿（約四十平方㍍）を奥側に移設する工事。本殿は一七一九（享保四）年に再建されたもので、文化財的価値が高いことから、解体するのでなく曳家方式を採用した。

この日は、床下に差し込んだ油圧ジャッキで、約十八トンの本殿を三時間かけて十㌢程度持ち上げた。今後、二日がかりで約五十㌢の高さまで上げた後、下にころの役割を担う丸い棒を敷き、ワイヤを柱に引っ掛け、巻き取り機で引っ張る予定。

三月から始まった同事業は拝殿の建て替え、進入路の整備などからなる大がかりな工事で、二〇〇九年五月の完成を目指す。総事業費は約二億四千万円。

太田浩司宮司（四七）は「本殿は貴重な建物なので大事にしていきたい。拝殿も広くなり、参拝者もゆったりできると思う」と話している。

（鈴木麻美）

山陽新聞　（平成十九年九月十四日）

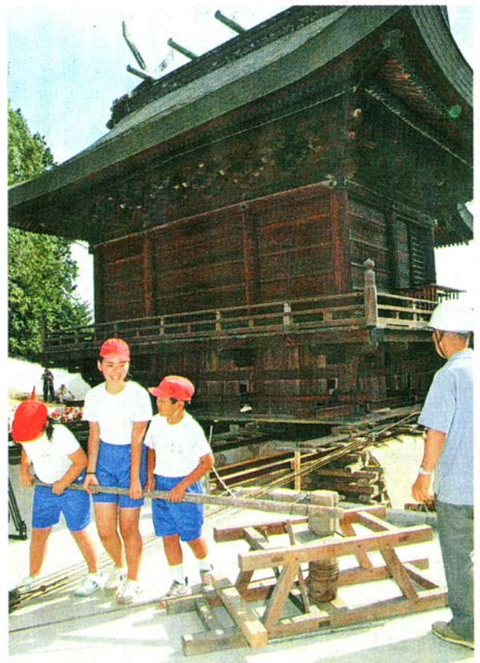
「曳家」で本殿動いたよ

児童が見学、体験

解体せず建物ごと移動させる「曳家方式」で本殿の工事を進めている早島町早島の鶴崎神社に13日、早島小の５年生125人が見学に訪れた。

児童らは木製の巻き取り機を使う昔ながらの手法による曳家作業も体験した。（鈴木麻美）

社殿改築中の早島・鶴崎神社



木製の巻き取り機で曳家体験する児童

この日は、油圧ジャッキで約五十㌢の高さまで上げた本殿を巻き取り機で平行移動させる作業が行われた。代表の児童が二台の巻き取り機をゆっくり動かすと、本殿が少しずつ移動。子どもたちは「動いた動いた」と喜んでいた。

葛原美保さん（二）は「あまり力を入れなくても、こんな大きな建物が動くなんて不思議」と話していた。

同工事は三月から始まった社殿改築事業の一環で、十日からスタート。拝殿の建て替えなどに伴い、九月下旬までに木造入り母屋造りの本殿（約四十平方㍍）を約十㍍北側に移す。一七一九（享保四）年に再建された本殿は文化財的価値が高いことから、解体せずに動かす同方式を採用した。

同事業は二〇〇九年五月の完成予定。総事業費は約二億四千万円。